

『千代田区一番一号のラビリンス』

2022年05月09日

森達也氏の『千代田区一番一号のラビリンス』は誠に奇妙な本である。森氏はオウム真理教を主題にしたドキュメンタリー映画「A」を発表して、何かと物議を醸し出し、社会に問いを発する人である。今回は、天皇制を主題に、ファンタジー小説を著した。「千代田区一番一号」は天皇が住む皇居の住所であり、ラビリンスとは皇居の地下にある「迷宮」である。天皇制の迷宮を表そうとしたタイトルであろう。実在と架空の人物が混在し、読んでいて、しばしば戸惑う。実在する人物なら、主人公の森克也は、森達也氏自身であろう。また、代議士の山本太郎氏、社会風刺のコントを演じるザ・ニューズペーパー、「ギョギョ」と叫ぶさかなクン、そして、平成天皇の明仁さん、皇后の美智子さんなどである。

出だしは、殿様がお忍びで町中に出かけるように、明仁さんが皇居から抜け出し、コンビニで食べ物を買って食べるということから始まる。そして、皇居に帰り、美智子さんと会話する。想像で書いた二人の会話が面白い。明仁さんは、かしずかれた生活をしているので、口数少なく鷹揚で、思考を巡らす学者風である。美智子さんは粉屋の娘さんで、好奇心が旺盛、聡明で事柄を的確に捉えている。二人の会話は例えば、「『私と結婚してよかったわね』『うん』『まあお上手』明仁は口もとをほころばせる」といった具合である。

主人公の克也は、天皇はどんな人か、何を考えているかに興味を持ち、知りたいと思っている。天皇は言葉を著しく制限され、どんな本を読み、どんなテレビを観ているのかもわからない。ベールに包まれ、しかも、言った言葉はあれこれと細かく注釈されている。また、克也は、象徴天皇制とは何なのかと疑問を持っている。憲法一条は「天皇の地位、国民主権」「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」と謳っている。天皇が日本国と国民統合の象徴であるというが、それは、どのような意味を持っているのか、判然としない。そして、天皇は、主権を持つ国民の総意に基くそうだが、国民は総意を聞かれたことは一度もない。

ドキュメンタリー作家の克也は、天皇に会い、日常生活を撮影することを計画し、色々試みるが、会うことができない。園遊会で、天皇に手紙で直訴しようとした山本太郎氏との関係で、克也は愛人の桜子と共に、明仁さんと美智子さんに会う機会に恵まれ、映像を撮ることも許される。あり得ない話だが、ファンタジーの楽しさである。4人で、地下の「最後の御前会議」が行われた部屋に行く。かつて、ポツダム宣言の受け入れに関し、東郷茂徳外務大臣は、国体護持（天皇と天皇制）を条件に受諾を主張し、阿南惟幾陸軍大臣は、国体護持のほか、占領は小範囲で短期間、武装解除や戦犯処理は日本の手で、などの条件を付ける。決議できず、天皇に聖断を仰ぐと、外務大臣の意見に同意すると言い、最終決定に至る。国民の生死を考えず、国体護持のみを問題にする御前会議のあり様に、私は愕然とし、天皇制に、完全に洗脳された恐怖におののく。昭和天皇は、戦後の日本統治に利用され、責任を問われることなく、まさに、国体が護持された訳である。長男の明仁さんは、天皇の戦争責任を負ってか、沖縄に幾度も出掛け、激戦地で頭を垂れている。彼は、新憲法では、天皇は「象徴」とであるとの意味を問い続け、苦難を負った国民の所に行き、腰をかがめ、ねぎらうことであると、被災地訪問に熱心であった。

著者の森氏は、天皇はタブーにされているが、「象徴」とは何であるのかを語れる社会にしようとして、本書を書いたのであろう。そして、象徴される側でなく、する側が「象徴」とは何であるかを提示すべきであると言いたいようだ。私は、皇室の人々の人権が保障され、自由にコンビニで買い物ができるような解放された人になればと思っている。